

最近の実験社会心理学

中村 恵 一

(67) 研究ノート

一九六二年にイギリスで出版された『実験社会心理学』(G・ハンフリーとM・アージャイル編)は社会心理学をクラスで実験的に教えたり、学んだりするためのハンドブックという性質をもっている。この本の冒頭にはハンフリーによる「ヒューマニストのための序論」がついており、この分野での実験という考えにぎょっとしかねない心理学者以外の人達のために、とくに心をくだしている。ハンフリーによると「古代ギリシャが実験科学で殆ど進歩しなかった理由は、彼等がどういいうわけか、筋肉労働を自由人の品位を落すものだと感じていたこと」で、同じ態度の痕跡はいまでもすたれずに残っている。ガラスばりの公務員住宅に住む今日でさえ、高い教養を持った人々は、人間の心を最後の聖域とみなし、人間の精神を実験することに嫌悪を感じている。「身体を露出することと同じように心を露出することは悪いが悪い」のである。ハンフリーはこうした現代心理学の最初にぶつかる問題に焦点を合わせ、ニュートンやジェンナーの例証を引きながら、種々の誤解をときほぐそう

とし、実験と思索とが決して互に相いれない試みではありえないこと、研究活動において *Humility* が大切であることを説いている。

同じ年に発刊された *The British Journal of Social and Clinical Psychology* はアージャイルとJ・ティザードの編集でこの方面の研究を発表し、この雑誌にはソビエトのルリヤも協力している。

ソビエトでは、一九六一—二年にまずレニングラード大学心理学科の専門課程で社会心理学を講義し始めた。講義内容には、グループ、集団内での心理現象の変化(いわゆる集団効果)やグループと集団内の交際形態の発達など集団心理の研究が含まれている。イエ・エス・クジミンによると、学級内の対人関係やパーソナリティー発達の研究のために、ソシオメトリーや七段階評定法などが用いられている。M・フォルベルクは質問紙法によって東ドイツとソビエトの少年・少女の自分自身についての観念を比較検討している。東欧やソ連でも今後はこの種の研究が一層活発になると思われる。

これまで社会行動と呼ばれるような現象はその取扱いのむずかしさのために、科学的究明が比較的遅れていたところである。だが、今日では以下にその一端を紹介するように、科学者の取扱いうる領域がしだいに広がり、より複雑な現象の解明がなされつつある。

私は現在のところG・S・Rという生理的指標を用いて社会心理的現象にとりくんでいる。このような研究には、主として複數

の被験者の間の相互作用をとりあげる場合と、ある意味で個人的な実験とが考えられる。私のこれまで行なってきたものは個人実験である。これは集団事態の研究を避けているのではなく単に研究の便宜的な順序に従ったまでである。課題はコミュニケーションに関するもので、一人の人に対して、人の顔写真や表情画面を見せ、特定の言語刺激や日常の質問刺激と言語反応あるいは内語的反応とを結びつけることによって、コミュニケーション事態に働く諸機能を内面からとらえてみようということである。

ここで私が問題としている研究は、大きくみて実験社会心理学の領域の中に位置づけることができる。社会心理学の実験的研究も、調査的方法による研究と共に、広い範囲にわたっており、そのうちのいくつかの方面では近年著しく研究が積まれてきている。そこで今回は私自身の実験報告は省略し、これらの領域で一般にどのような研究がどのように行なわれているかを知っていたらと思う、主としてコミュニケーションや社会的学習に関する課題を中心に、興味ある研究サンプルをえらび、その研究活動の一端を紹介してみることにした。

動物の社会行動

人間のもっている高次な精神機能もきわめて原始的で単純な活動から進化・発達してきたものである。そこで動物の行動を系統的にあとづけてみることは、人間の社会行動の研究にも参考になることが多い。

動物の社会的学習研究では、例えば古く、N・E・ミラーとJ・ダラー⁽⁵⁾が白ネズミによる模倣の研究を行なっており、我々でもこれに基づいた研究が行なわれてきた。またミラーによるおきかえの研究⁽⁷⁾は、精神分析的な概念を条件づけの実験によって明らかにしようとしたものとして、すでに古典的な研究といえよう。フランスのル・ニ⁽⁸⁾は社会現象の般化の研究に従事しており、このミラー達の実験を社会的あるいは对人的場面に般化の説明を拡大するきわめて興味深い傾向の一つであるとみなしている。ただし人間に関してこの方法での実験研究が殆どなされてこなかったといっている。

II・F・ハローウとW・A・メーソンはサル⁽⁹⁾の社交性の研究を行なっている。生まれてから一定の期間、社会的に他の動物と隔離された環境で育てたサルと野生のサルとを比較してみると、社会的刺激やその後の集団内での仲間に対する行動などに明らかな相違がみられる。メーソンによると、生まれたときから社会的相互作用を制限されたサルは、あまり群居せず、より攻撃的で、性的行動において不足しており、経験のあるメスは、彼等よりも野生のサルをえらぶという。幼い時に動物間コミュニケーションの欠けていたことが、このような社会的不適応の原因になっているとメーソンはみなしている。身振りや表情などの学習に基づく動物間コミュニケーションが、その社会行動に大きな役割を演じていることがわかる。

R・E・ミラー⁽¹⁰⁾達はサル⁽¹⁰⁾の表情認知能力の研究を行なった。一頭のサルが別のサルを見せられたとき、それが合図となって

電気ショックが提示され、もしそのときそのサルがバーを押せばそのショックが回避されるという、社会刺激による回避反応の条件づけが試みられた。十分、条件回避反応が形成されてから、その反応を一たん完全に消去させてしまう。その次に電気ショックを受けて不安または恐怖の反応をあらわしているサルを見せると、自分は少しも痛い目に会わないのに、一度消去していた回避反応が再び回復した。同じ様式の実験を現実のサルのかわりに、サルの写真(カラー・スライド)を使って行なった場合にも、同様の結果が得られた。また恐怖のしせいを示す写真は、恐怖を示さない動物の写真よりも効果的に回避反応を引き起こすことも明らかになった。このようにサルは他のサルの情動を解釈し、それによって他者の情動と同種の情動を感じたりすることがあるらしいことが示された。

またミラー達は、次に新しい条件づけの手続を考え出した。⁽¹¹⁾サルは光がつくとそのときバーを押さなければショックがくる事態におかれ、光に対する回避条件反応が形成される。次に二頭のサルが向き合っておかれ、一方のサルには、条件刺激が提示されるが、バーが手もとになく、もう一頭のサルは、バーを押すことができても、条件刺激が提示されないしくみになっている。一方は、危険が迫ってくるという情報をもっているが、回避する手段を持たず、一方は回避する手段はあっても情報を持たぬという事態である。実験は成功し、一方のサルからもう一頭のサルへコミュニケーションが行なわれ、安定した回避反応が形成された。

しかしこの実験では、二頭のサルが面と向い合っているの
で、コミュニケーションの様式がどんなものであるか、詳細を
明らかにすることができなかった。そこでミラー達は最後に、
視覚的な手がかり(サルの顔の表情)のみによって、回避反応
が生ずるかどうかを試すために、閉回路テレビを用いて実験し
た。条件刺激はスピーカーによる clicker で、刺激を受けるサル
の頭と顔の部分が、テレビ・カメラでとらえられ、反応ザル
の目の前の受像機に提示された。もしも条件刺激の提示されて
いるとき、反応ザルがバーを押さなければ、両方のサルにショ
ックが提示されるのである。実験は十日間連続して交互に交代
して行なわれた。結果は実験の始めから、回避反応がかなり高
い水準であらわれ、サルがテレビの映像による相手の顔の表情
を手がかりに、協力的に回避反応を行なうことができることを
示した。ミラーによると、条件刺激が提示されたときのサルの
表情は、あごをかたくとじ、口の角を下方に引き、鼻孔を拡
げ、目は見開き、焦点のない目つきになるという。もしも回避
反応によって、条件刺激が早く終らないと、ショックの時期が
近づくにつれ、不安が増し、顔の表情がさらに変化するとい
う。

しかしコミュニケーションの上手・下手に個体差があり、実
験した六頭のうち二頭のサルは、刺激ザルとしては下手であっ
た。というのはこの二頭があまりにも効果的に伝えずるため
である。即ち、これらのサルは、条件づけ期間中ずっとまった
く不安げで、その不安が反応者によって認知されるので、条件

刺激が提示されない間にもひんぱんに信号間反応が生じたのである。

このようにミラー達の実験は、サルが視覚メディアによって相手の表情を認知し、それに応じて協力的に回避反応しうるとを示した。実験の始めから高い水準の回避反応を引き起こしたのは、サルが生まれてからの社会経験によって仲間のサルの表情認知を学習してきたためであると予想される。このような動物間コミュニケーションの研究は、系統発生的に比較検討できると共に、人間研究において必ずしもなしえない研究を行なうことができる点に特色がある。次に子どもを対象とした研究例をとりあげてみよう。

子どもの社会的学習

子どもはおとなや他の子どもの行動を模倣することを通じて、社会行動のパターンを身につける。ことばの学習においても発達のある段階では模倣の演ずる役割が大きい。

マス・メディアの発達は、従来の対面的な接触による学習に加え、新しい型の学習ルートを子ども達に提供した。こうしてマス・メディアの子どもに与える効果に関する研究が発達した。A・バンドゥラらの研究は攻撃行動が子どもによっていかに学習され、再生されるかを示している。⁽¹²⁾

実験は三段階からなっている。即ち、1モデル刺激にさらされる過程、2軽い欲求不満にさらされる過程、3模倣行動が引き起こされる過程である。欲求不満攻撃説に基づき、攻撃的に

ふるまうモデルに接したあとで、欲求不満を経験すると、モデルによって示された攻撃行動が模倣されるといふものである。

七二人の保育学校の子どもをモデルの現実性の大小に従って三群に分け、(1)実際におとなが目の前で攻撃行動をしてみせるグループ、(2)同じおとなの攻撃行動がフィルムによって提示されるグループ、(3)漫画映画の登場人物によって攻撃行動の演ぜられるのを見るグループとする。

攻撃行動はモデルが大型の人形に向かって、目新しい仕方、暴力的及び言語的に攻撃をしかけるもので、人形の上ののってなぐること、人形をけとばすこと、空中に投げ上げることなどからなる。モデルにさらされたあと、子どもを別室に連れて行き、そこにある魅力的なおもちゃで遊ばせるが、十分にのってきたところであそびを中断させ、「このおもちゃは大変よいおもちゃで、誰にも使わせなかった。これは他の子ども達にとっておくことに決めた」と云う。こうしてフラストレーションを経験させてから、次の室へ連れて行き、模倣行動がみられるかどうかをテストする。その室には模倣的攻撃玩具(モデルの使った玩具)、非模倣的攻撃玩具(二ちょう拳銃など)および非攻撃的玩具(クレヨン、自動車など)が置いてある。

実験の結果によると三群とも子ども達は模倣的及び非模倣的攻撃行動を示し、その量は統制群よりも明らかに多かった。モデルの現実性の水準に従い、(3)のグループよりも(1)のグループの方が攻撃模倣行動が多くみられた。男の子は女の子よりも攻撃行動が多く、攻撃的なガン遊びが多かった。一方女の子は人

形の上にするが、それをなぐるのをさし控える傾きがある。また男性モデルにさらされたグループは女性モデルのグループに比べて、攻撃的ガム遊びが多くみられた。

現実にはこのような模倣行動の発生如何は、代理強化の正負、両親の示す模倣行動への態度等の要因によって影響を受けることが予想されている。

バンドゥラの研究は、取り扱いにくい問題を、きわめて隙のない実験の中に具体化したものとして、アメリカの代表的な研究の一つといつてよからう。

模倣はこどもにおいて最もよく観察されるが、ここに示された例のように、モデル効果は社会的に禁止または抑圧された行動の脱制止を導くものとして、青年や成人の社会行動研究にもとりあげられる。インタビュウからえられた結果によると、米国の習慣から、青年期の男子は、*double or multiple dating* において単独の場合よりも、より性行動の脱制止をひき起こしやすいたことが指摘されている。R・H・ウォルターズとR・D・パークらは、青年におけるモデル行動の脱制止効果を研究した⁽¹⁵⁾。前の被験者の目の動きを示すものとしてフィルム上に移動する光点をもつ一連の裸体写真を提示された学生は、その後で、同様の写真を示されると、制止されないモデルの行動にさらされた場合には、より脱制止的反應のみられることが明らかになった。

このようなモデルの効果は、階級間の模倣のようなマクロな次元でも考えることができる。ことばや表情などコミュニケーション

ションの手段もこうした社会的学習過程を通じて形成され、変容されるのである。ある文化では、ある感情の表現が抑圧され、別の文化では逆に受け入れられやすい。このような日常生活における相違が、表情認知の文化的差異、地域的差異等を生み出している。

表情の研究

非言語的コミュニケーションの問題として表情の研究はきわめて重要な課題である。これまでに多くの研究が日本及び諸外国で行なわれてきた。それらの研究には、日本人と米国人の表情認知を比較した実験や、ギリシャ人と米国人の比較を試みた実験⁽¹⁷⁾などが含まれている。これら代表的な表情研究はすべて表情写真を用いての判定の実験である。これに対し、写真を用いない実験にはD・ソンプソンの研究⁽¹⁸⁾があり、学生に指定した情動をことばを使わずに、その場で表情によって表わすように努力させ、向き合った判定者がその表わそうとした情動を当てるものである。この研究では写真による判定とは違った面も示されている。例えば、愛は演技者が表現するのに最もむずかしいと意識するために、かえって判定者にとっては、わかりやすい表情になっている。

顔の表情ばかりでなく、話す声にも表情がある。E・クレマー⁽¹⁹⁾によると、声の表情研究にはほぼ三つの方法がある。一つはあいまいな一組のことばを台本に使う方法、一つは電子的なフィルターを通して、声の意味的な成分だけをとってしまいう方

法、もう一つは、被験者のまったく知らない外国語を用いる方法で、最後の方法は文化的差異の研究にも用いることができる。クレイマーは米国人に日本人による日本語の声を聞かせてその情動を判定させた。この結果によると、日本人が日本語で悲しみを表現すると、米国人が英語で表現する場合よりも悲しみが米国人によく伝わりやすいことが示された。しかし軽べつの正答率は偶然性の域を出ないものであった。

多くの表情研究には、表情認知における人類共通の普遍性が強くあらわれているが、部分的には著しく異なる面もまた示されている。

表情を含めて情動反応は身体的生理的变化を基礎としている。ここからコミュニケーションの過程を生理的指標によってとらえてみようとする実験が行なわれる。

GSRによる社会現象の研究

一人の人の情動反応が、それを見ている別の人の情動反応を引き起こす現象がある。例えば、ねたみでは、相手が肯定的な情動を体験していると思つて、かえつて不愉快になる場合であるし、サディズムは、相手が不愉快になっていると感じて、愉快になる場合である。これに対し、同一化が起こっているときは、相手の情動と類似した情動を体験する。S・M・パーカーはこのように他者の情動反応に依存して生ずる情動反応の基本的な機構を、条件づけの実験によって明らかにしようとした。⁽²⁰⁾ 実験はGSRの条件づけを他人が受けているのを見るとき

事態で、その人からGSRをとり、CSの提示と、他人の、UCS提示に対する外見的な反応(手をあげること)を知ることによって、同時に自分のGSRにも条件づけ効果があらわれるというものである。

自分では少しも電気ショックを受けないにもかかわらず、代理強化の効果があらわれる結果になっている。パーカーの研究は見ている人のGSRを測定している実験であるが、これに対し、グループ内の各メンバーからGSRをとり、メンバー間の相互作用を検討している実験も多い。これらの型の研究には、集団カウンセリング、集団討議の実験の他、ゲーム事態の研究もある。

D・シャピロらのゲーム事態における行動と生理の研究⁽²¹⁾は、社会現象のメカニズムを三人グループのメンバー間相互作用から追求しようとするものである。例えば集団内で誰がリーダーとなるかなど、相互作用のパターンは問題解決に対する成功と失敗の積重ねから決定されるはずだという考えに基づき、色あてゲームの実験を行ない、各人がリーダーとなつて正の強化を受けているときと、それ以外のときとで、その人の行動と生理的变化を比較検討している。一般的にみて、この種の研究は連統的なデータの分析方法を工夫しておくことが必要である。

すでに与えられた紙数もつきているので、これらの実験に関する論評は省略することにする。ここでとり上げた以上の研究は、広い領域の一部を代表しているにすぎないが、発生的、文

化的、生理的など種々の角度から究明されてあり、このことは
 まなち多くの未開拓の課題が山積してゐる。この領域における
 今後の研究活動の結果は、明らかに複雑な現象の解明が可能であ
 ることを実証するであらう。

(73) 研究ノト

(1) G. Humphrey & M. Argyle. *Social psychology the rough experiment*. 1962. London: Methuen.
 (2) George Humphrey (1889—) 哲学及び心理学の研究者、四十七年から五十六年までマントヌンキー大の心理学教授をいよめる。
 (3) E. C. Кузьмин. О предмете социальной психологии. *Воп. Психол* 1963, 1, 142—145. 参照。
 (4) E. C. Кузьмин К В вопросу о социальной психологии. Проблемы общей и индустриальной психологии. 1963, 141—155.
 (5) N. E. Miller & J. S. Dollard. *Social learning and imitation*. 1941, New Haven: Yale.
 (6) 吉田正昭「白ねずみの社会的学習」『心理学研究』一九五三年 二四巻一号 一三—二〇頁。
 (7) N. E. Miller. Theory and experiment relating psychoanalytic displacement to stimulus-response generalization. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1948, 43, 155—178.
 (8) J-F. Le Ny. La généralisation dans une épreuve de jugement social. *L'année psychologique*. 1963 II.

333—350. ハ・ニは唯物論的社會心理学を提唱してゐる。
 (9) W. A. Mason. The effects of social restriction on the behavior of rhesus monkeys: I. Free social behavior. *J. comp. physiol. Psychol.*, 1960, 53: 6, 582—589. 参考参照。
 (10) Robert Earle Miller (1926—) 44マンハッタン大で実験社會心理学を研究してゐる。
 (11) R. E. Miller, J. H. Banks, & N. Ogawa. Communication of affect in "cooperative conditioning" of rhesus monkeys. *J. abnorm. soc. psychol.*, 1962, 64: 5, 343—348.
 (12) R. E. Miller, H. B. James, & N. Ogawa. Role of facial expression in "cooperative-avoidance conditioning" in monkeys. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1963, 67: 1, 24—30.
 (13) Albert Bandura (1925—) 7 社會心理学者、五九年中ロウスタンキー大助教授。
 (14) A. Bandura, D. Ross, & S. A. Ross. Imitation of film mediated aggressive models. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1963, 66: 1, 3—11.
 (15) A. Bandura & R. H. Walters. *Social learning and Personality development*. 1963, New York: Holt. 参照。
 (16) 大脇教授、乾教授、及び本明教授指導下にまける研究 4430。

- (7) H. C. Triandis & W. W. Lambert. A Restatement and test of Schlosberg's theory of emotion with two kinds of subjects from Greece. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1958, 56 : 3, 312—328.
- (8) D. F. Thompson & I. Meltzer. Communication of emotional intent by facial expression. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1964, 68 : 2, 129—135.
- (9) E. Kramer. Elimination of verbal cues in judgments of emotion from voice. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1964, 68 : 4, 590—596.
- (10) S. M. Berger. Conditioning through vicarious investigation. *Psychol. Rev.*, 1962, 69 : 5, 450—466.
- (11) G. Levin & D. Shapiro. The operant conditioning of Conversation. *J. exp. Anal. Behav.*, 1962, 5 : 3, 309—316.

(1 慶大 大 学 学 会 刊)